

---

# アイスティー

立花友香

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アイスティー

### 【Nコード】

N0640B

### 【作者名】

立花友香

### 【あらすじ】

少女の失恋を綴った詩的小説。少女の悲しみを流れるような文章で表現してみました。

最初から最後まで何も分からなかった。  
それを恋と呼んでもいいのなら、私は彼に恋をしていた。でも、もう失ってしまったの。

思い悩むと悲しみの湖に沈んでしまう。

その湖の水は凍えるほど冷たく、表面には厚い氷が張っているの。  
沈み込んだら最後、二度と浮かび上がることはできない。

私は人のぬくもりを求めて秋の雑踏に繰り出したの。

けれども、すれ違う人々が私の悲しみを知るわけもなく、笑顔で私を追い越してゆく。

彼らには人生という進む道がある。日常という帰る場所がある。

私には？私には何も無い。以前はあったの。あなたという現在が。

どのくらい歩き続けたのだろうか？足が震える。

これは疲れから？それともこれから続くこととなる孤独への恐怖から？

分からない。どちらでもいいわ。だって私はくたくただもの。

薄暗いこの喫茶店は何故か落ち着くの。

コーヒーはぬるくて、ケーキも美味しくないのだけれど、BGMに流れるゴシックロックが私の好み。：ああ、それは彼の好みだったわ。

ここは彼との待ち合わせの場所。

意味のないお喋りに何時間を費やしたかしら？彼の瞳をどれだけ見つめたかしら？

あの時の私は心地よい痛みを伴う甘く不思議な彼との時が永遠に続くものと思い疑っていなかった。おそらく彼も。

ねえ、あなたは私を忘れる？

交わした約束。破れた約束。嘘に真実。沢山のすれ違い…もうそんなものどうだっていいわ。思い出は嘘となったの。

確かな記憶。それは鏡のよう。一時しか姿を映せない。時とともに薄れ、塗り替えられて、もう、それが本当に起こったかどうかなんて誰にも分からない。

ねえ、私たちは友達だった？

私自身で打ち砕いた友情というガラスの置物。その破片でさえも拾い上げることができなかった。

破片に両手を朱に染め、私は叫ぶ。「私を赦して！」と。塞がれた声の通り道。届かぬ叫び。届かぬ想い。

アイスティーにいつもは入れないシロップを入れたの。

透明なそれは琥珀色の私の心に溶け込んで、静かなきらめく彼との思い出の日々を垂れる。

青いストローで勢いよくかき混ぜると、思い出は多くの記憶に紛れてもう見分けが付かない。

私はそれを飲み干すと、席を立って店を出た。

コップに残された氷の塊が名残惜しそうにカラン、と音を立てたのを聞いたのは、私の気のせいかもしれない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0640b/>

---

アイスティー

2010年10月28日01時22分発行